

# Role Construct Repertory Test の一貫性に関する研究

—— 合成グリッドを用いての検討 ——

東京大学教育心理学研究室 味 香 信 子

## A Study on the consistency of Role Construct Repertory Test

—— An examination in terms of “the synthetic grid” ——

Nobuko AJIKA

The consistency of Role Construct Repertory Test based on G.A.Kelly's personal Construct Theory was examined by using test-retest method and “the synthetic grid” method devised by the author. The examination was made from three aspects on consistency; consistency of construct system, element system and content of constructs. The results of factor analysis showed the consistency of Role Construct Repertory Test in all aspects.

### 目 次

- I 問 題
- II 方 法
  - A RCRT 質問紙の作成
    - 1. 役割タイトル
    - 2. 3人組
    - 3. エレメントの評定
  - B RCRT の質問紙の一貫性の検討
    - 1. 固有値の変化パターン
    - 2. 固有値の相関
    - 3. エレメントの変動
    - 4. 対人認知距離の一貫性
    - 5. コンストラクトの限定性
    - 6. 因子の比較
    - 7. コンストラクトの混淆
  - C RCRT 質問紙の実施
  - D 面接の実施
- III 結果と考察
  - 1. 固有値の変化パターン
  - 2. 固有値の相関
  - 3. エレメントの変動
  - 4. 対人認知距離の一貫性
  - 5. コンストラクトの限定性

- 6. 因子の比較
- 7. コンストラクトの混淆
- IV ま と め

### I 問 題

G. A. Kelly (1955) の人間の認知と行動に関する“パーソナル・コンストラクト理論”によれば、個人は自己を取り巻く世界に対し、「仮説を設け、それを検証し、検証結果に基づいて仮説を修正する科学者のように」行動しているという。個人は、自分独自の仮説を組み立て、それを基準の枠組みとして将来を予期し、行動を決定するというのである。この枠組みを、パーソナル・コンストラクト (personal construct) と呼び、コンストラクトの組み合わせた個人独自の認知構造をコンストラクト・システム (construct system) と呼ぶ。さて、このコンストラクト・システムは、個人が自分の様々な経験から自分で構成するものなのだが、新しい経験は常にこのシステムの柔軟な変化を要請する。ところが、システムが環境と矛盾する形で固定してしまうことがままたり、そうすると、人は自分のコンストラクトによる予期に裏切られ、混乱を生ずるようになる。この混乱に対処できずにいる状態が精神的な葛藤状況と考えられよう。精神療

法家であった Kelly は、精神療法家の役割が、クライアントの固定したコンストラクト・システムに適切な変容をもたらす手助けをすることによって、クライアントが自ら困難に対処できるようにすることであると考へた。そして、クライアントのコンストラクトの抽出とそのシステムの理解のために、「Role Construct Repertory Test (RCRT)」を創案した。

このテストは、一定の評定尺度に従ってそれに回答を強いる SD 法などとは異なり、被験者自身の記述をもとにコンストラクトを引き出し (elicited construct)、そのシステムを探ることを目的とする。被験者や問題点によって、形成・内容の変更が可能であるが、標準的な手続きは以下の通りである。

手順①自分にとって重要な個人 (これをエレメントという) をあらかじめ定めた役割タイトル (父親、親友など) に従って約20人特定する。

②エレメントの中で、あらかじめ定められた3人組にあてはまる3人を比較し、その3人組 (triad) をコンストラクトによって2人对1人に分ける。(2人に類似し、かつ、もう1人にはあてはまらない特徴をコンストラクトと呼ぶ)

③約20の3人組で、それぞれコンストラクトを出す。

④出てきたコンストラクトで3人以外のエレメント全員を評定する。

⑤統計分析を行う。

結果の分析は Kelly による複雑な手計算の方法があるが、今日ではコンピュータの発達に伴い、様々な分析法が工夫されている。RCRT の特徴は、このテストが投影法的な色彩を帯びながらも、データが数値化されているために、この種の個性記述的なテスト——文章完成法やロールシャッハ・テスト、TAT など——よりも統計的処理が加えやすいことである。

さて、RCRT は、Kelly の創案以来現在に至るまで、被験者本人がある程度意識して重視している視点を、個性記述的に、かつ、数値的に引き出すことの可能な技法として、高い評価を受けてきた。しかし、その弱点として、被験者の負担の大きさ、臨床的に実施する上で熟練が必要なこと、統計処理の複雑さなどがあるため、理論の大きさに比べると実用化には歯止めがかかっている。実際、近年の研究を概観してみると、最もよく研究されているのは技法 (grid technique と呼ばれている) そのものの扱い方や、臨床以外の応用の分野である。RCRT のこれまでの研究論文 (1953-1987) の26%が理論、10%が治療、60%がグリッドに関する研究であった (Neimeyer, Baker and Neimeyer, 1990)。応用分野で

は、例えば、Kelly の当初の目的からやや離れて、認知心理学の分野で認知的複雑性の研究がこの技法の変法を用いて行なわれたり (Bieri et al., 1966)、日本において教育心理学の分野で、児童・生徒に対する教師の視点を探るための教師用 RCRT (近藤, 1988) が工夫されたり、その他の様々な分野 (環境心理学・産業心理学 etc.) で応用されたりしている。

臨床的に用いるにしろ、応用研究を進めていくにしろ、RCRT の研究を進めていく上で、まず問題となるのが、その信頼性であろう。信頼性研究は、これまで再テスト法を用いてすすめられているが、いまだ日本では検証されておらず、また、国外でも確立されたとは言い難い。実用化に歯止めがかかっているのは、信頼性が確立されていないことも一因と思われる。

信頼性の検証を困難にしている一番の問題点は、RCRT において、1回目と2回目とで、抽出されるコンストラクトの内容も、エレメント内容も変化してしまい、“同一テストを2回行ない、2回の評定値間の相関係数を信頼性係数とする”という従来の信頼性の測度を、そのまま用いることができないことである。

そこで、本研究は、RCRT の信頼性をどのように調べればよいか、その方法を考え、信頼性を検証することを目的とした。これまでの研究と同様に、基本的には再テスト法を用いる。RCRT が真に個人のコンストラクトを抽出するものであるならば、期間をおいて実施した2回の RCRT の結果は等しくなくてはならない。ある個人がその時点まで築きあげてきた概念枠組みをとらえきれている必要がある。少なくとも使用に耐え得るだけの資料が1回のテストで検査者に与えられなくてはならない。また、臨床的な介入による被験者のコンストラクト・システムの変容を研究するためには、RCRT 上に現れた変化が単なる時間の推移に伴って起きたものなのか介入の効果なのかを区別できなくてはならない。

さて、再テスト法を用いるのではあるが、先ほど述べたように RCRT の信頼性研究は従来の測度を用いることができないため工夫を要し、信頼性という用語を用いること自体厳密には問題が生じる。先行研究においても「一貫性」「安定性」「convergence」等、様々な用語が用いられている。そこで、信頼性係数に代わる方法を工夫する本研究においても、これから信頼性のより広い概念と考えられる“一貫性”という用語を用いることにする。

信頼性に関する最初の報告は Hunt (1951) によるものである。この研究では大学生30名と精神病患者9名を対象に一週間後に全く別の役割タイトルを用いて再テストを行なったが、2回のテストのコンストラクト間の一致度

は平均約70%であった。コンストラクトの一致を確かめるためにこの時用いられた方法は、個々のコンストラクトを評定をもとに一つ一つ検討し、機能的に同価値であるという証拠を被験者からの確認によって得るという方法であった。このとき同時に、3人組の数が一定の時、エレメント数が20人と30人とで表出されるコンストラクトの数がほぼ同じであること、3人組が20から30あるとそれ以降新しいコンストラクトがほとんど出ないことを確認した。

次に、Fjeld and Landfield (1961) は、2週間の再テストで全く同じエレメントを用いた場合  $r = .78$ 、役割タイトルが同じだが別のエレメントを用いた場合  $r = .79$ 、2回共制限のない場合  $r = .80$  を得ている。

コンストラクト間の関係については、Pedersen (1958) が、38人の被験者のプロトコルから5つのコンストラクトをランダムに選び、2週間後に同じエレメントに対してこれらのコンストラクトで評定させた結果、2つの列パターンの比較で、メディアン・ファイ係数.72を得た。また、Fjeld and Landfield (1961) は、20人の被験者で、同じコンストラクトに対する同じエレメントの評定が一致率83%であったと報告しており、Fransella and Bannister (1977) は評定のパターンからコンストラクトを比較し、ファイ係数.61を得た。

一方、Bannister and Fransella (1966) は、全てのコンストラクトを組合せて出てきたスピアマンの順位相関係数をさらに順位付け、2つのテストで相関を取り、.80を得た。Slater (1972) は、角距離を用いてグリッド(コンストラクト×エレメントの格子)を直接比較する係数を提案している。

さて、既に見てきたように、一貫性研究は様々な角度からなされており、Fransella and Bannister (1977) によれば、RCRTの一貫性に関する研究は「コンストラクト間の関係のパターン」「コンストラクト間の個別的関係」「抽出されたコンストラクトの安定性」「エレメントの安定性」等、8つの領域に分けられるという。ところが、これらの研究に用いられているグリッドの形式は一定しておらず、それぞれの研究者が自分の開発したグリッドに対して研究しているというのが実状である。Cronbach (1956) が早い時期に指摘した通り、「グリッドスコアの一貫性研究に関する大問題の一つはグリッドが変化し得る方法の数である」。日本に関して言えば、一貫性の研究はまだなされておらず、様々なグリッドを用いてそのまま応用研究がすすめられている。従って、これからの日本でのRCRTの活用をはかるために一貫性を研究しよう、という筆者の問題意識からは、Kellyの主旨

にたちかえってRCRTそのものの構造の持つ特徴をとらえることが必要である。

そこで、本研究では、いかなるグリッドでも応用できるように、質問紙作成の際、なるべくKellyの原版に近い形を取ることにした。また、臨床的視点を忘れないように、従来のような数値的一貫性のみでなく、Hunt (1951)の研究に代表されるような内容の一貫性をも重視することにした。そして、データ解釈の際には、被験者自身の説明を尊重し、具体的描写をするようにした。

## II 方法

### A RCRT 質問紙の作成

KellyはRCRTの手法として、場面に応じて記述式、口頭式、個別式など8種類の手法を開発している(Kelly, 1951)。また、後の研究者によって種々の方法が開発されている。(Bieri, 1966; Adams-Webber, 1979)しかし、できるだけKellyの原版に近く、コンピュータ処理が可能で、かつ日本人に合った質問紙、という条件を充たすものが見当らなかつたため、本研究では新たに質問紙を作成した。この質問紙は本研究においてのみならず、後に日本でなされるであろう研究において、たとえ場面や使用法に応じて新たな質問紙を作成したとしても、それがKellyの原版に添ったものであるならば、本研究において明らかにしようとする一貫性を参考にすることができるとなるように考えられた。

作成した質問紙がKellyの原版と異なる点は以下の点である。

#### 1. 役割タイトル

本研究では、まずKellyの複数の原版から、日本の大学生に適用することを考慮して役割タイトルを選んだ。それぞれの原版よりも選んだタイトル数が多いため、組合せた結果、削除したものは少ない。しかし、例えば、「信頼できる牧師」というタイトルは削除した。その上で、新たに“過去の自分”“理想の自分”“祖父母”を付け加えた。前二者は、青年期における自己の変化をどう受けとめ、どのようなアイデンティティを持っているかを、時間の流れの中で捉えるために加え、後者は、青年の見る高齢者の位置付けのために加えたものである。役割タイトル数は総数31で、その中身をまとめて大きく分けると自分(①-③)・家族(④-⑨)・親密(⑩-⑬)・友(⑭-⑰)・誘意(⑱-⑳)・権威(㉑-㉒)・価値(㉓-㉔)に分けることができる。以下に全タイトルを示す。

①現在の自分

②過去の自分(以前の自分、または10代の頃の自分)



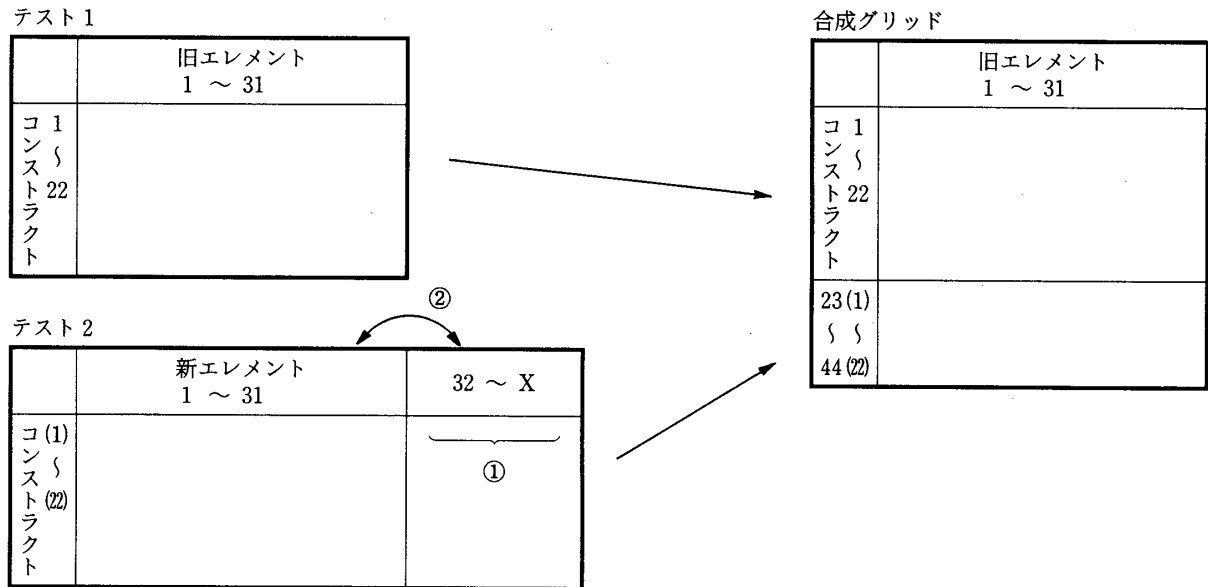
1	2	3	20																
1	2	3	21																
1	2	3	22																

Table 1 RCRT 質問紙

**B RCRT 質問紙の一貫性の検討**

最初に、一貫性を検討するために本研究で考案された合成グリッドについて説明する。合成グリッドとは2回

のテストをまとめて一つの分析にかけることができる新しい方法である。合成グリッドは2つのテスト結果から Fig. 1 のようにして作られる。



- ① テスト 1 に出てきてテスト 2 に出てこなかったエレメントを追加し、評定する。
- ② 交換して旧エレメントでグリッドを構成

Fig. 1 合成グリッドの作成

最初のテスト(テスト 1)と再テスト(テスト 2)のエレメントは異なる場合があり、エレメントからなる 3 人組もそれに伴って変化する。両テストの単純比較はできない。そこで、エレメントを共通にすることによって1つの結果として扱えるようにして分析する。

合成グリッドを作成するために、テスト 2 の手続きはテスト 1 と以下の点において異なる。

- ① テスト 1 とテスト 2 のエレメントの比較を行ない、人物の変動をチェックする。
- ② テスト 1 に出てきてテスト 2 に出てこなかったエレメントについて最後の評定ができるようにする。

一貫性の検討の具体的方法は次の通りである。

[コンストラクト・システムの一貫性を調べる]

1.<固有値の変化パターン>再テスト法で、2 回のテストの因子構造を個別に比較する。

2 回のテストの固有値の変化パターンをグラフ化し、個人の 2 回のテストでのパターンの一致を調べ、さらに

全事例のパターンの比較を行なって、個人毎にパターンの差が見られるかどうかを調べる。テスト 1 とテスト 2 の一貫性が保たれているならば、個人毎にテスト 1 とテスト 2 の固有値変化のパターンは一致し、その個人独自のパターンを示すと考えられる。また、合成グリッドから得られた固有値の変化パターンは、なお一層そのことをはっきりと示すであろうと予測される。

2.<固有値の相関>各因子の固有値の相関をとる。

1.で固有値の変化を見、テスト 1 とテスト 2 の変化パターンの一致を個人別グラフで確認するが、それ以外に、それぞれの因子の固有値の相関を取ることによって、一致を確認することも考えられる。Jones (1961) は、第 1 因子によって説明される総変動の比率が大きければ大きいほど、認知構造は単純であると考え、複雑性の測度として第 1 因子を用いることを提案している (Bonarius, 1965)。また、RCRT の変法である The Bannister-Fransella Test を用いた Chetwynd (1974) の研究によれば、50 人の被験者で、2 回の測定の主成分分析の第 1

主成分の説明率の相関は.98と出ている。

そこで本研究では、上記のグラフ上での比較に加え、認知的複雑性の指標と言われている第1因子の固有値の相関、加えて、第2、第3因子の相関を取ることにした。方法は、重複するコンストラクトを含まないグリッドを、両テストについてそれぞれ主因子法で分析し、得られた固有値をコンストラクト数で割った商の相関をとる方法を用いた。重複するコンストラクトを含めなかったのは検査者の与える3人組の数や種類によって、重複数の変動が生じる影響を減じようと考えたためである。

[エレメント・システムの一貫性を調べる]

形式的な一貫性(3.)と実質的一貫性(4.)の双方を調べることによって、RCRTのエレメント・システムの促え方がはっきりすると思われる。

### 3.<エレメントの変動>を調べる。

Bannister and Mair (1968)は「グリッドは、被験者の用いているコンストラクトを抽出するもので、個人の無限の氏名録に対峙させられる恐れはない」と述べている。コンストラクトは、役割タイトルや分類試行数、エレメントの数に関わらず、かなり一貫して引き出されるというのである。

したがってエレメントの変動が直接、RCRTの内容に変化を与えることはないと考えられるが、本研究でも、名目的信頼性を調べるために、エレメントの再現率を見してみる。具体的にはエレメント変動数の単純な数値比較である。

### 4.<対人認知距離の一貫性>自分と他エレメントとの距離を計算し、2回のテスト間の相関をとる。

上述のように、RCRTでは、被験者にとって適切な役割タイトルが与えられていれば、同じ役割タイトルに与えられるエレメントがたとえ2回のテストで変化しても、同様あるいは類似のコンストラクトが抽出されると考えられる(Bannister and Mair, 1968)。そこで、抽出されたコンストラクトを用いた評定値で、被験者の対人認知距離を計算すると、被験者の対人認知空間は一定のはずである。自分と他人との距離は、被験者の対人認知空間を考える際、最も重要な指標と考えられる(Norris and Norris, 1976)。したがって、2回のテストの対人認知距離の相関が高ければ、RCRTが被験者にとってのエレメントの持つ役割を捉えていること、RCRTによって引き出されるコンストラクトによって、被験者がエレメントを一貫して評定しているということがいえるであろう。

例えば、自分にとって“親友”と感じられる人への認知距離は、対象となるエレメントがPさんからQさんに

変わったとしても、変わらない。言い換えれば、その認知距離にある人のことを“親友”と名付け得るのである。これはもちろん、被験者の対人認知の枠組みの変容が起こった際に、その距離が変化することと何ら矛盾しない。

2週間の期間をおくことによって、エレメント自体は人によって変化も起こるであろうし、エレメントに対する認知に変化が起きることは十分考えられ得るが枠組み自体を崩し、変容をもたらすような出来事や介入がない限り、対人認知距離の一貫性は保たれるであろう。また、たとえそのような出来事があったとしても、2週間で全体が変化してしまうことは、滅多に起こる事ではない。

以上のような前提の下に、対人認知距離の計算をグリッドから行ない、2回のテスト間の相関をとることにした。

具体的には

i 現在の自分(エレメント①)他のエレメント(②～③)との間のユークリッド距離

ii 理想の自分(エレメント③)と他のエレメント(①, ②, ④～③)との間のユークリッド距離

を、それぞれテスト1、テスト2について算出し、その相関を13人の被験者について算出した。

### 5.<コンストラクトの限定性>

3人組が増加したとしても、一定数のコンストラクトが出た後は、再びそのコンストラクトが繰り返し使用されると考えられる。そこで、分析に用いた22のコンストラクトの重複について調べる。

[コンストラクト内容の一貫性を調べる]

数値的な一貫性研究に加え、面接調査を行ない、より個別的・具体的にRCRTの一貫性を考える。個人から抽出されるコンストラクトは非常に個別的なものであり、文脈依存的なものである。数値処理のみではその内容をとらえきれない。それはHunt(1951)に始まる先行研究で、コンストラクトに使用された語句を何回もの作業を経て検討、比較していることからもうかがわれる。臨床的にも最も重要となるのは、コンストラクトの内容であり、臨床以外の応用研究においても内容を疎かにすることはできない。本研究では事例を一つ取り上げてその内容を検討する。

### 6.<因子の比較>

コンストラクトの同一性を一つ一つ確認していったHuntの方法は、ことばの差異に敏感な被験者には通用しにくい。また、膨大な時間がかかる。計算機の使用できる現在、因子分析して、因子を比較する方法がより有用と考えられる。3つの分析(2回のテストと合成グリッド)を行ない、それぞれ出てきた因子が共通のものであ

るならば、RCRTの内容的一貫性が言えるであろう。

### 7. <コンストラクトの混淆>

合成グリッドの個々の因子がテスト1とテスト2の変数(コンストラクト)を含んで形成されれば、2回のテストに意味上同じものが出てきたことが確認され、内容的一貫性がより一層はっきりいえることになる。

### C RCRT 質問紙の実施

実施期日 テスト1 1985年10月9日

テスト2 1985年10月23日

(2週間後)

被験者 大学生13人(男性7人,女性6人)  
(21才~30才)

### D 面接の実施

①因子毎にまとまったコンストラクトについて、コンストラクト間の関係や個々のコンストラクトの意味などの解説を求める。

②テスト1とテスト2のコンストラクトの関係について、その一致点、類似点、関連性、相違点、因子の関連性を聞く。

③合成グリッドについての妥当性(納得がいくか)及び感想を聞く。

実施期日 1985年11月第4週~12月第1週

## III 結果と考察

### 1. 固有値の変化パターン

ここでは、全事例の固有値の変化パターンを、テスト1, テスト2, 合成グリッドの3つにおいて比較するため、グラフを示す(Fig.2~Fig.4)。

固有値の計算はハウスホルダー法により、三角対角化を行ない、QR法によって求めた。コンストラクトは、重複したものが存在した場合も省略せず、全てのコンストラクトを用いたグリッドで計算した。また、固有値 $\geq 1.00$ で因子数を決定し、回転した結果である。

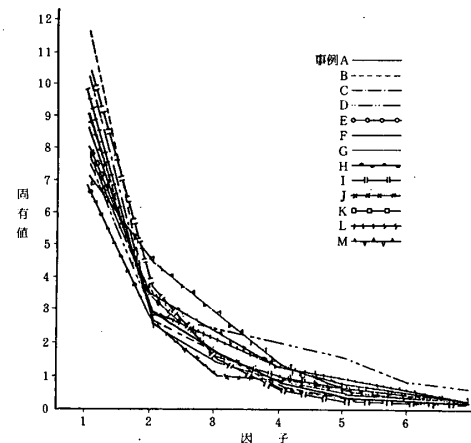


Fig. 2 固有値の変化 (テスト1)

Fig.2では、13事例を同一グラフ上に載せたため、事例毎の変化が読み取りにくくなっているが、個人毎に固有値の変化パターンが異なっていることがわかる。特に第1因子の固有値は7から12と幅があり、比較的同質な被験者が集まっていたにもかかわらず、認知の分化の度合いが異なることがうかがわれる。また、ほとんどの者は4因子までで80~90%の説明がつき、中でも第1因子は非常に大きな意味合いを持つと考えられる。

次に、テスト2の結果を用いて数例の変化パターンの比較を試みた。

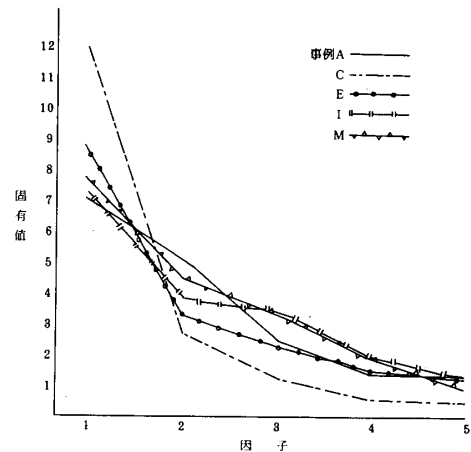


Fig. 3 固有値の変化 (テスト2)

事例Cは第1因子の占める割合が特に高い事例であり、B, GはCと似たパターンであった。事例A, I, Mは、除々に説明がついていくもので、その下降度は低い。Eは、CやAの中間のパターンである。このように個人別のパターンが見られたことから、被験者を幅広く数多く取ることによって、認知的複雑度に関して種々のパターンに分けることの可能性も示唆される。

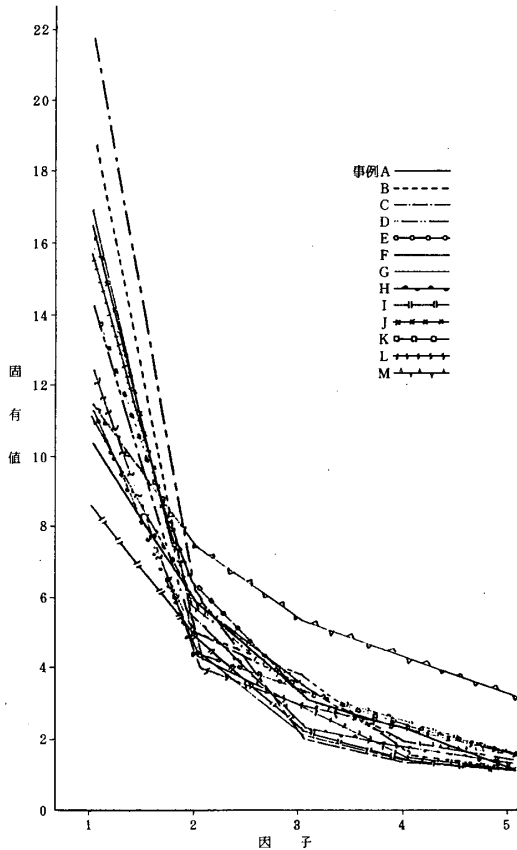


Fig. 4 固有値の変化 (合成グリッド)

さらに、合成グリッドについてみる (Fig.4) と、情報量が多くなった分だけ、個人の変化パターンの分化がはっきりする (合成グリッドについては、重複数が多くなったため、重複したコンストラクトは省いて計算してある。また、因子数の決定は個人資料の分析で行なうように、回転して、最もよく説明のつくように決定したものである)。

一見するとどれも 1 因子構造に見え、実際その傾向は強いが、Fig.3に見るように、個々の事例を具体的に一つ一つ比較してみると、それぞれのパターンがあることがわかる。例えば、CとIでは明らかに因子構造が異なっているのがわかるだろう。

個々の事例に関してはテスト 1、テスト 2、合成グリッドの結果を紙幅の関係でランダムに 3 例のみ Fig.5 ~ Fig.7 に掲げた。

この 3 例を見るだけでも、1 人 1 人異なるパターンがあり、しかも個人内では 2 回のテストで類似のパターンがあらわれていることが見て取れる。

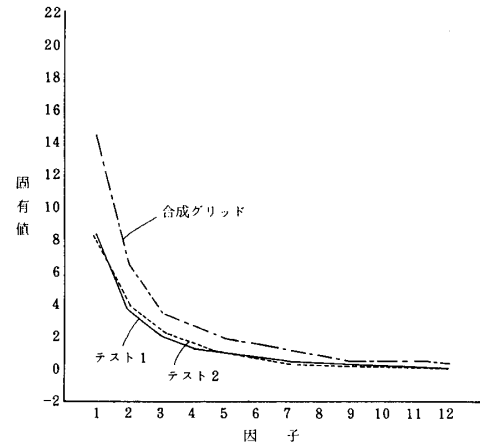


Fig. 5 固有値の変化パターン (事例K)

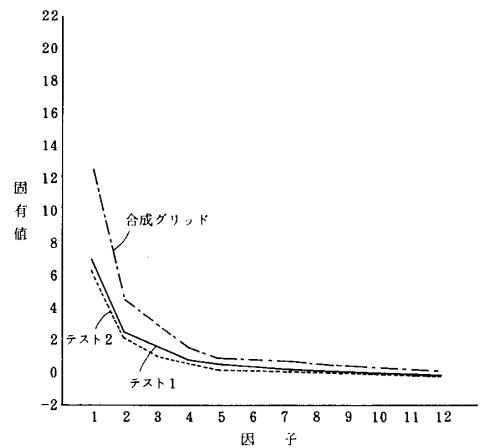


Fig. 6 固有値の変化パターン (事例L)

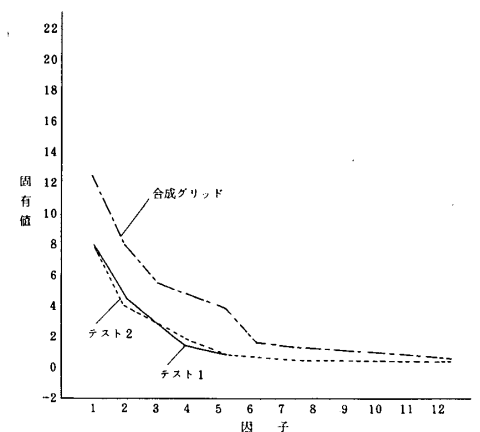


Fig. 7 固有値の変化パターン (事例M)

## 2. 固有値の相関

テスト 1 とテスト 2 の第 1 因子同士の間関係数は .62, 第 2 因子同士の間関係数は .51, 第 3 因子同士の間関係数は .58 であった。やや低いですが、いずれも相関があることがわかる。低めの相関値は、事例毎の数値上の散らばりが 2 回のテスト間の散らばりに比して小さいことの影響を受けていると思われる。また事例数が 13 と少ないことも関係あるかもしれない。



3. エLEMENTの変動

全ELEMENT31のうち、自分に関するELEMENT 1~3を除く28人中、20.7%の5.8人に変動(ELEMENTの一致率79.3%)があり、新出したELEMENTは、16.1%の4.5人であった (Table 2)。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
変動	6	5	0	6	4	8	6	6	8	8	0	10	7	5.8
新出	4	2	0	4	3	7	4	4	9	9	0	8	6	4.5

Table 2 ELEMENTの変動数

変動の原因は二週間中のELEMENTとの交渉のあり方、あるいは被験者の回答上のきまぐれによるものと考

えられる。ELEMENTが変化することによって、個々のコンストラクトに影響はあったが、認知空間がほとんど変動しない(後述4.)ことや、因子に大きな変動がない(後述6.)ことから、今回の役割タイトルにおけるELEMENTの変動はテストの結果に大きな影響は及ぼさなかったと考えられる。先述のBannister and Mair (1968)らの結論が確認された。

4. 対人認知距離の一貫性

テスト1とテスト2の距離の相関はTable 3.の通りである。

現在の自分と他のELEMENTとの距離の相関の平均は、.78、理想の自分と他のELEMENTとの距離の相関の平均は.84であった。したがって、対人認知距離の一貫性は高いと考えられる。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
現在の自分と他ELEMENTとの距離	.83	.74	.84	.89	.89	.84	.79	.65	.54	.79	.79	.71	.80	.78
理想の自分と他ELEMENTとの距離	.89	.85	.92	.77	.86	.85	.87	.82	.68	.88	.92	.84	.82	.84

Table 3 対人認知距離の相関

5. コンストラクトの限定性

3.で述べたように、個人から抽出されるコンストラクト数は、限られたものである。3人組が増加したとしても、一定数のコンストラクトが出た後は、再びそのコン

ストラクトが繰り返し使用される。Table4は重複(本人が同じと認めたもの)したコンストラクトを除いた場合のコンストラクト数を表にしたものである。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
テスト1	17 (5)	21 (1)	22 (0)	18 (4)	19 (3)	21 (1)	22 (0)	19 (3)	10 (12)	22 (0)	20 (2)	18 (4)	21 (1)	19.2 (2.8)
テスト2	16 (6)	20 (2)	22 (0)	17 (5)	17 (5)	21 (1)	19 (3)	15 (7)	13 (9)	22 (0)	19 (3)	14 (8)	19 (3)	18.0 (4)
差	-1	-1	0	-1	-2	0	-3	-4	+3	0	-1	-4	-2	1.7

コンストラクト数  
(重複数)  
増減を問題としない変化数の平均

Table 4 コンストラクト数

個人によってばらつきが見られる。すべてのコンストラクトを書いた者から、12個の重複をさせた者までおり、平均18.6個である。2回のテストでコンストラクト数は平均1.7個変わっている。

次に、付け加えた9のコンストラクトを見てみると、ほとんどのコンストラクトは、表現が異なっている

にしる、前出の22のコンストラクトに類似しており、いずれも因子分析して新しい因子が抽出されるとは思われなかった。ただし、前出の22で重複の少なかった人ほど目新しい(表現の異なる)コンストラクトを出す傾向がある。

参考までに述べると、今後 Kelly の原版にない3人組

を用いるとすれば、3人組23, 24すなわち(現在の自分, 過去の自分, 理想の自分)(現在の自分, 父親, 母親)が有用であるという印象を受けた。また, Kellyによる3人組9, 10は, コンストラクトの重複する被験者が多く, どちらか片方でよいように思われた。これらに関しては分析を加えたわけではないので提案しておくに止める。

## 6. 因子の比較

	テスト1	テスト2	合成グリッド
F 1	自分の内面世界を豊かにしようとするか	自分を受容してくれるかどうか	対人関係における協調性があるかどうか
F 2	対人関係における協調性があるかどうか	対人関係における協調性があるかどうか	自分を受容してくれるかどうか
F 3	自分を受容してくれるかどうか	自分の内面世界を豊かにしようとするか	自分の内面世界を豊かにしようとするか
F 4	経験豊富で堅実であるかどうか	経験豊富で堅実であるかどうか	経験豊富で堅実であるかどうか

Table 5 事例Kの因子の対応

被験者との面接に基づき, 合成グリッドを中心にしてみると

(F 1)対人関係において, 自己中心的でなく周囲と協調するか否か。特に, 封建的な人は古さを頑固に持ち続け, 新しいものに飛び込まないために対立関係を生み, 孤立を招く, という。

(F 2)自分を愛し, 受容してくれるかどうか。それは時に, 自分がその人に対し献身的になれるかとか, 自分への期待が高いかという視点と結びつく。

(F 3)目的意識を持って日々研鑽するか。無為に日々を送るか。興味, 関心の領域が広く芸術を愛するかという視点。

(F 4)人生経験が豊富で, 苦悩しながらも地道な生き方をしている人々に対し, 合理的に要領よく世の中を渡っていく人々がいる。まとめていうと要領がいいかどうかという視点である。

以上のように3つの因子分析で明らかな内容上の対応が見られた。対応の仕方はF 1が必ずしもF 1に対応するわけではなく, 重みは変化したが, その人にとって重要なコンストラクトは, 語句は変わっても2回のテストの両方に抽出された。

## 7. コンストラクトの混淆

合成グリッドの因子はテスト1とテスト2のコンストラクトが混淆して構成された。2回のテストでコンス

13事例の中で平均的と思われる参考事例を挙げ, 因子の比較を行なう。紙数の関係で, ここでは一事例の簡単な紹介にとどめる。詳細及び他の事例についてはまた改めて報告する予定である。

### 事例 K 大学生女子

3つの分析でそれぞれ4因子が抽出された (Table 5)。

ラクト番号が同じでも, 必ずしも同じ因子に含まれるということにはなかったことから, 同じ3人組でも常に同じコンストラクトで分けるとは限らないことがわかるが, 全コンストラクトをまとめてみると, 必ずどこかに同じコンストラクトが出てきている。

## IV まとめ

本研究は, 統計的分析と面接調査によってRCRTの一貫性を検討したものである。

まとめてみると,

1. 個人の2回のテスト結果で因子構造は類似し, 個人特有のパターンのあることが示された。

ある個人が世界を捉える際には, その人固有の認知システムを用いるということが推察された。例えば, ある人は明るいかどうかという見方で他人の40%を判断し, 人生経験の有無で30%を判断する。その判断基準となる概念や, 一つの基準で判断する場合は, その個人特有のものであり, RCRTの結果上に表れる。

2. 2回のテストでエレメントの5分の1は変動したが, 対人認知距離は高相関を示した。

個人にとって, 役割タイトルにあてはまる他人は変わっていくことがあるが, 役割に対する認知の仕方は大きく変動するものではない。自分と, 自分を取り巻く人々の対人距離はほぼ一定しており, RCRTでは,

個人の対人認知空間を捉えることができる。

3. コンストラクトはその人特有のものであり、その数は限定されている。

エレメントは個人にとって明らかに熟知したものであり、エレメントの分類に用いられるコンストラクトは、その場で作り上げられると考えるのは妥当ではない。普遍的、潜在的コンストラクトがRCRTによって引き出されると考えるべきである。コンストラクトがその人特有の限定的なものであることは、2回のテストに出てきた因子の構造や内容に明らかな対応が見られることから確認され、また、3人組の分類数が増加しても、全く新たなコンストラクトが出てくるわけではないことから、確認された。

4. 1回のRCRTで、被験者のコンストラクトをほぼカバーすることができた。

ほとんどの事例で、2回のテストのコンストラクトが交じり合って、一つの因子を形成した。つまり、どちらか一方のテストを行なったとしても、因子を形成するような重要なコンストラクトは出てきているということである。ただし、1回目より2回目、2回目より合成グリッドの方がよりよくコンストラクト・システムをあらわしているという被験者の指摘は、RCRTの結果を利用する際の検査者側の姿勢に注意を喚起するものであろう。

5. 合成グリッドは、RCRTの一貫性を研究する上で有用であることが示された。

本研究で考案した合成グリッドは単なる再テスト法による一貫性研究よりも多くの示唆を与えたといえよう。

本研究によって、RCRTが個人のコンストラクト・システムを理解していく上で有用であり、一貫性があるということが確かめられた。

今後の研究の課題としては

- ① 因子構造の類似性を数値上で確認できる手法の開発
- ② 自分との距離ばかりでなく、あらゆる距離を取り、対人認知空間の広がりを見ること
- ③ 臨床的に応用性が高くなるよう、技法と分析法に工夫をこらして、被験者にとっても検査者にとっても簡単なものを開発すること

等が挙げられよう。今後は、信頼性と妥当性がより明らかにされ、RCRTが有効に利用されていくであろう。

## 文 献

- Adams-Webber, J. R. 1979 "Personal construct theory" New York: John Wiley & Sons
- 味香信子 1985 RCRT(Role Construct Repertory Test)の一貫性に関する研究 東京大学教育学部卒業論文 未公刊
- Bannister, D., & Fransella, F. 1966 A grid test of schizophrenic thought disorder. *Br. J. Soc. clin. psychol.* 5, 95-102
- Bannister, D., & Fransella, F. 1977 "A manual for repertory grid technique" New York: Norton
- Bannister, D., & Mair, J. M. M. 1968 The evaluation of personal constructs. New York: Academic
- Bieri, J. 1966 Cognitive complexity and personality development. In O. J. Harvey (Ed.), *Experience, structure and adaptability.* New York: Springer
- Bonarius, J. C. J. 1965 Research in the personal construct theory of George A. Kelly: Role Construct Repertory Test and basic theory. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research, Vol. 2.* New York: Academic
- Chetwynd, S. J. 1974 Generalized grid technique and some associated methodological problems, ph. D. Thesisi, univ. of London
- Cronbach, L. J. 1956 Assessment of individual differences. *Annual Review Psychology*, 7, 173-176
- Fjeld, S. P. & Landfield, A. E. 1961 Personal construct consistency. *J. psychol. Rep.* 8., 127-129
- Jones, R. E. 1961 Identification in terms of personal constructs. *J. consult. Psychol.* 25, 276
- Kelly, G. A. 1955 "The Psychology of Personal Constructs" New York: Norton
- 近藤邦夫 1988 教師-児童関係と児童の適応 東京大学教育学部紀要第28巻 pp.103-142
- Hunt, D. E. 1951 Studies in role construct repertory: conceptual consistency. Unpublished M. A. thesis. Ohio State University
- Neimeyer, G. J., & Neimeyer, R. A. 1990 "Advances In Personal Construct Psychology" JAI Press Inc.
- Norris & Norris 1976 The measurement of self identity. In Slater, P. (Ed.) *The measurement of intrapersonal space by grid technique vol. 1.* New York: Wiley
- Pedersen, F. A. 1958 Consistency data on the role construct repertory test. Unpublished manuscript, Ohio State University
- Slater, P. 1972 The measurement of consistency in repertory grids. *Br. J. Psychiat.*, 121, 45-51

## 付 記

本論文は、1985年度東京大学教育学部に提出した卒業論文の一部に基づいている(味香, 1985)。本論文の作成にあたり、御指導いただきました東京大学近藤邦夫助教授、芝祐順教授、帝京大学鎌原雅彦助教授に感謝致します。